第 101 話　スタジオ夜話

「なぜラジオドラマは衰退したのか」

☆　はじめに

読者皆様のお蔭をもちましてスタジオ夜話 101 話です。これからも精進して行きます。さてスタジオ夜話今回は音へのかかわり方、こだわり方などに関連して予定通り「サウンドドラマの今後」「なぜラジオドラマが衰退したのか」「アートとしての音」についてのお話です。

これらテーマは多くの研究者が取り上げていますが奥が深く一言的にはお話できない内容量です。今回はその始まりとして「なぜラジオドラマが衰退したのか」を取り上げて、スタジオ夜話的にお話することにしました。お付き合いよろしくお願いいたします。

☆　そもそも論「情報伝達媒体の移行」

昨今の様々なレポートを調べてみると、そもそもラジオドラマの問題以前にラジオという媒体そのものに問題があることが分かります。またすでに地デジ放送にも同様の問題が発生していることもご存じのことだと察します。

ご想像の通り今や社会はネットによって成り立っているといっても過言ではありません。全ての情報伝達媒体がネットに依存する様相を示しています。地デジ在来各局が Tver による見逃し配信だけではなくネットによる放送の Live 配信を始めようとしています。この現象は TV に限らずあらゆる分野でその傾向はより確実なものとなってきました。ネット TV、ネットラジオという名称で、オリジナルの情報伝達媒体が今はまだ分かりますが、そのうちネットムービー、ネットサウンド？とかになりオリジナルの媒体が不明になる日もそう遠くない気がします。しかしこれも仕方が無いことかもしれません。民放各社は広告費収入がネットに押されて減少する中で生き残りをかけて、ネット配信サブスク収入で全世帯から NHK 的に収入を得る方向へと向かっています。

将来的には配信会社は全国で数社に統合され現在の地デジ局は無くなります。現在の Amazon や Hulu などが整理統合されそこに地デジ局が加わるといったことも想像されます。映画、TV, ラジオ、雑誌などの印刷媒体等々、全てネット上のコンテンツとなります。もちろん好みの問題もありますから雑誌など印刷媒体は若干残る可能性はあります。映画も大画面でイマーシブ音響、劇場は残るかもしれません。しかしハリウッドでは映像は VR を使い音はヘッドフォン VR サウンドのネット有料配信を実現しようとしています。近い将来的な展望、コンテンツ配信はネットでというのは想定の範囲内であることは間違いのない事実です。

☆「なぜラジオドラマが衰退したのか」Ⅰ

ラジオドラマの面白さは脚本の面白さとそれを助ける音楽や効果音の相乗効果によるものです。と脚本家 : 西沢実氏は語っていました。確かに脚本の出来が重要であることは理解できるのですが、音や音楽はそれを助ける存在なのでしょうか？筆者は対等の関係だと確信しています。非常に出来の良い物語であっても音や音楽の出来や使い方が悪いと聴く気も起きません。

脚本家の先生方は、それは創り手の問題だとおっしゃいますがあなたも創り手の一人ではありませんか？一方お話の展開や主題などは理解が難しいのですが音そのものの面白さで聴かせてしまう作品もありました。NHK 放送の寺山修司作叙事詩「まんだら」です。

ほかにも音で聴かせてしまう作品があり当時はラジオという電波媒体ではなく、レコードなどで発売もされました。（放送後）どうも多くの脚本家の方はあまり音そのものには興味が無いようです。

また多くのラジオドラマ研究者や制作者はラジオドラマは人の聴覚の特性（物理的、心理学的）に合わせた音創りとか、小説などと同様にその描写に想像を加え楽しめるものであり、CG などが無いころタイムマシンや宇宙人等を題材にありえない設定をラジオドラマではリアリティーをもって表現することができると語っています。嘘です。ラジオドラマの音自体にリアリティーはありません。小説を読むのと同様に物語の流れの中でリスナーが情景を想像しているのです。決して劇中の音によって情景を見ている（感じている）わけではありません。

ドラマで展開する音は、情景の説明用の音なのですから当然です。今映像の世界では CG や VFX の進歩にともない、VR の世界では本物を超えるリアリティーで、様々な作品が私達に提供されています。想像しなくても目前に、そこに、存在しているのです。

音の世界でも映像ほど直接的ではありませんがそのリアリティーは想像を遥かに超えた音になっています。

ラジオドラマは想像力や展開される設定などを理解しなければ楽しめないものなのでしょうか。創り手はそこで作品創りをしなければならないのでしょうか疑問です。

日本大学芸術学部の橋本教授は小説などは、読み返せるがラジオドラマは原則的に時間軸の流れのなかで聴取するものであり、理解や想像し易い音構成や展開をそれなりに、説明的に創り込む必要があると論じています。

つまり設定や音構成は、そのリスナーが理解や想像する場面に必要な説明的演出だと言っているのです。

筆者は仕事がらラジオドラマの脚本を見ることが多くあります。脚本を読んで想像力をめぐらすと作品のテーマ、物語はもと

よりその情景や音が聞こえてきます。

下手に音声化するよりも面白いのです。小説と同じです。わざわざラジオドラマ化せずに脚本のそのままではいけないのでしょうか？

説明的な音構成のラジオドラマはオリジナルの脚本以上に優れた作品になるのでしょうか。想像を超えたリアリティーある音で展開する作品ラジオは、音を伝達するメディアですが今や作品を展開するメディアではありません。

明白な事実です。ラジオドラマが衰退した訳は伝達媒体そのものの、選択間違いをしてしまったことにもあります。

これは今に始まったことではありません。昭和 39 年に東京オリンピックが開催されました。日本は高度成長期で国民は皆、忙しい毎日を送りました。TV もカラー化されました。のんびりとラジオドラマを聴く時代ではなくなって来たのです。

それでも昭和 50 年代前半までは芸術祭など旧文部省、文化庁などの後押しもありラジオドラマ制作も続けていました。

50 年代後半に入ると忙しい日本人はラジオを「ながら聴き」の道具にしてしまいました。もちろん例外的な信奉者はいましたが、絶対数が違います。そして平成に入り CG や VFX が格段と進歩を遂げ、もはや想像では無いほどのリアリティーを持った映像が、私達に提供されるようになってきました。後押しなど要らなかった。音で表現する作品はラジオから離脱するべきだった。

映像と同様に制作全般にかかわる新しい方向性を見い出す必要があったのです。まだ間に合うかもしれません。しかし、今でもラジオドラマ制作者たちはそれでもラジオドラマは面白いという、考え方をしています。それは音作品とラジオドラマを同一視しているのであり、音で描く音作品とは本質的に違うということに気が付かねばなりません。

そもそも論からも、衰退の理由を考えれば、かつてのラジオドラマ制作手法からの脱却は必須、新たなネットという媒体の可能性を見つけてネット配信して収入を見込めるグレードの音のドラマ？作品を制作しては如何なものかと思うのです。

☆「なぜラジオドラマが衰退したのか」Ⅱ
こんなことぐらいじゃ NG　自戒を込めて

筆者の考え方には反対の意見が多数あるかとは思います。確かに昔のラジオドラマはそれなりに面白かったかもしれません。

今でも時々ラジオドラマは放送されています。しかし、そうした作品からもその衰退傾向は明らかです。その原因はそもそも論、以外にもあります。作品の質が落ちているのです。物語や題材の質の話ではありません音創り、音の構成などの質です。ほかにも出演者の問題や演出にもそれは及びます。具体的にお話します。例えば場面設定で「昭和初期、季節は秋の始め、庭の植え込みに面した縁側、男が月を眺めながら鼻唄まじりに盃、あたりには虫の声、少し離れた黒塀の料亭から宴の音」こんな設定を、今放送されているラジオドラマはどんな音を使い、その構成はどう表現されているのでしょうか。以前お話したことがあるかもしれませんが筆者はこの設定を次のように音構成しました。

1）スタジオ内に座敷のセット、地方、立方を手配　数名の役者さんで宴会・・録音
2）1 の素材を持って虫の鳴く頃にロケ、鼻唄を唄う主演の役者さん同伴で・・録音
3）2 を収録中に 1 素材を離れた所で再生

こうして正にリアリティーある場面が再現できました。（こんなことぐらいじゃ NG ！自戒を込めて）のお話です。

今なら 3D や VR 的な音でよりリアリティーある音として構成が可能です。では現在のラジオドラマの音構成は・・・？となる訳です。

ネット配信サブスク収入可能なコンテンツに仕上げるのならサウンドライブラリーから集めた音構成では難しいといえます。最新技術で場面設定に必要な音は手間暇かけて創意工夫で創ります。いまのテクノロジーを駆使すればお金の取れる音がまちがいなく創れます。そんな音の作品を聴いてみたいのは筆者ばかりではないと思います。

☆次回は

次回は今回に関連してサウンドドラマの今後についてお話します。

現在のオーディオ環境でのサウンドドラマの可能性を提供する側、リスナー側のそれぞれに焦点を当て技術的側面も含めた制作手法や問題点などを探って行きたいと思います。お付き合いよろしくお願いいたします。

季節は秋の様相が深まってまいりました。季節のかわり目です。読者皆様がご健康でありますようお祈りいたします。

ー森田　雅行ー